

氏 名 せん の み わ こ  
千 野 美 和 子  
学位(専攻分野) 博 士 (教 育 学)  
学位記番号 論 教 博 第 123 号  
学位授与の日付 平 成 19 年 1 月 23 日  
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当  
学位論文題目 箱庭療法における水

論文調査委員 (主 査)  
教授 岡 田 康 伸 教授 伊 藤 良 子 助教授 田 中 康 裕

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は児童臨床の現場で、長く心理臨床に携わってきた著者がその体験を基に、箱庭療法に関して研究したものである。著者は箱庭療法がイメージを用いることで、心理治療的効果があると経験上感じてきていた。言語では自分の内界を表現しづらい児童にとって、イメージ表現は有効な方法であるとも考えていた。しかも、思春期前後の少女の箱庭での水のもつ治療的イメージが大切であると感じることが多かったと言う。このような発想を基として、本論文では治療的な水のイメージの投影を可能にする砂箱の底が青いことの意義を論じた。本論文の構成は7章からなる。

第1章は「水のイメージ」と題されている。物質としての水がどのような歴史をもち、今、ここに存在するにいたったかなど広く、水に関して概観した。さらに、水というものが人間のころにとっても根源的イメージを持つものであることを創世神話から見ていく著者の立場を明確にした。さらに、水についてエリアーデやバシュラールやユングの考えを明らかにした。著者が考える水の癒しとは水のイメージと関わることで、水の中に内在するさわやかさ、生き生きしたものを自分のものとするのである。そして、宇宙の生成と消滅に関わる水の視点をもつことで、我々の意識にとって恐ろしく否定的に見えるものを、宇宙の次元から視野を広げて眺めることが可能となり、心理的治療につながると考えた。

第2章では、「箱庭療法における水—理論的検討」と題され、箱庭療法の過去の理論的文献を元に砂箱の底が青いことの意義について論じられた。さらに、砂との関わりをとりあげた。底の青の表現をするためには砂を掘ることが不可欠である。底の青にとって、切っても切れない関係にある砂の特徴について述べ、2つの関係を通して底の青の表現の特徴について論じられた。著者は砂をさわることによって、底の青をだす作業は情緒的体験になることに意味があることを強調した。

第3章は「箱庭療法における水の表現—過去の事例を通して」と題されている。ここでは過去の事例研究から、水の表現について調べ、まとめた。カルフをはじめ実際に水を利用した石川や津田の事例や底の青の表現としての田熊や田中などの事例を示した。底の青に表現される水のイメージがユングのいう無意識を投影しうるものであることを強調した。クライアントが底の青を表現し、それが箱庭の展開に意味をもつためにはセラピストの底の青による水の表現への深い関心が必要である。

第4章は「事例その1—大地をうるおす水」と題された、中学3年生女子の不登校のケースである。医師からは自律神経失調症と診断されていた。著者は、一過性の症状として、身体症状を出しているが、学校での不適応がきっかけとして不登校になっているが、不登校の状態が内閉という形でまもられた後は身体症状を出しておらず、心身症とはいえないと考えている。箱庭の作品で、初回から箱の底の青を出しており、1回を除き、この青はいつも出ていた。このことによって、箱庭のほとんどの領域が1度は水でうるおされたことになった。クライアントはほとんどの領域の砂を掘り、地下水を探し、それを地上にもたらず、その作業を毎回おこなっていたことから、これらはエネルギーを蓄え、大地をうるおす水であったと著者は考えた。

第5章は「事例その2—深みにつながる水」と題された、母とうまくいかない小学校4年生女子のケースである。11回の箱庭の作品が作られ、すべてに池があり、すなわち底の青、水が出ていた。底の青の表現は深みにつながる水のイメージで

あり、水の深みに繋がることによって、クライアントはそこで母との関係の改善をなし、家から出て行くこともできた。すなわち、水はすべてのものを作りだす基であると著者は言う。

第6章は「事例その3—深淵を表わす水（底の青の表現が否定的な水のイメージから肯定的な水のイメージへと変化した事例）」と題された、中学校1年男子である。体調がすぐれず、入院するが、異常は見つからず、心身症とかかれた紹介状をもってクリニックを訪れる。面接期間の前半ではほぼ毎回箱庭を作った。初期の頃に表現された水のイメージは治療的意味をもたない否定的な水のイメージが表現されていた。オアシスが生じ、それからは肯定的な水のイメージが投影されるようになった。この変化が考察された。

第7章は「箱庭療法における水の意味「鉄のハンス」の泉のイメージとつなげて」と題され、グリムメルヘンの「鉄のハンス」に登場する泉をとりあげ、箱庭療法における水の意味について論じられ、セラピストの態度について言及された。

## 論文審査の結果の要旨

箱庭療法は砂と箱と玩具の3つの用具が微妙に関連しあい、心理治療効果をあげてきていると考えられてきている。底の青色は水を意味しており、砂を掘っていくと底の青にたどり着き、そこに、「水」を見出すと考えられている。著者はこの論文で、箱の底にぬられている青色に注目し、その意味を明らかにしようとした。確かに、箱庭療法の3つの用具についての言及はこれまでよくなされているが、底の青（水）についてはあまり言及されていない。しかし、底の青は「水」ができたこととそこは「底」であることの2つの意味があり、この「底の青」を研究したことは有意義であると評価された。しかし、論文の中ではこの青（水）と底との2つの意味をもう少し分けてほしかったと指摘された。能動的に砂を掘っていくと底まで行き着く。この底は終わりの意味であり、「かぎり」であることを意味する。そこが水であることは水が出てくる、水が出てきたということはそこから始まるという意味もある。著者が示した事例でも、水が出て来て、湧きあがってきて、そこから展開していくことが示されていた。この点を大事にしてほしかったと指摘された。

「底の青」に意味が感じられた文献をレビューしたが、事例研究でのケースでは心身症が多かった。これはどのような意味があるのかが検討された。心身症はせき止められているエネルギーの大きさが砂を掘り、それによってエネルギーが解放されるためではないか。すなわち、閉塞した状態から解放されるイメージが底の青で表現されているのであろうかと説明された。また、著者が示した3つの事例もレビューされている事例でも思春期のケースが多いが、これは何故であろうかと検討された。著者は思春期のクライアントは砂に触る必要があるからだという。それは思春期の主な問題は母子関係と身体とが関係することが多いからではないかという。また、セラピストとクライアントとの距離のとり方は思春期においては難しい。ところが、箱庭療法を紹介することで、少しはとりやすくし（媒介になるものの存在）、適度な距離が取れやすくなる。この適度な距離によって、セラピストの作品へのコミットが適度になって、それがクライアントを自由にし、砂に触り掘らすむ（あたかも無意識に接近するように）のではないかと説明された。

クライアントへのセラピストのあり方がテーマになった。このセラピストのあり方は「鉄のハンス」の童話になぞらえながら説明しているのはわかりやすくよいと評価された。また、「同じ空間に居ることが大切」を強調したのは今までも主張されてきていることではあるが、著者の体験と言葉で述べたのは迫力があつたと評価された。

底の青を「地と図」との関係も示されることがあるとし、その関係として捉えたのは興味深いと評価された。すなわち、青が地すなわち、背景になるときと、図、すなわち浮かび上がってくる場合を示し、図は癒す力があると著者は主張した。

セラピストが水の意味すなわち、水の神聖さや万物の創造のときからあることや無意識を意味することや癒しとの関係や女性性の象徴としての水などを知って、箱庭療法を見守ることが大切であることが主張された。また、そうすることがクライアントが作品を展開させていく力になっていることを結論としているのは、セラピストの教育・訓練に役立つであろうと評価された。

形式的なことではあるが、引用の仕方はやはり、統一したほうがよいのではないかと指摘された。一部だけが英文でのものであり、他は日本語であるが、英文も日本語にしておくほうがよいのではということである。また、参考文献や引用文献は翻訳ものが多いが、研究と関係深い文献は原典にあたってほしいという注文もあった。しかし、これら不十分な面もあるが、本論文は博士論文としての価値は十分に認められると評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。  
また、平成18年10月24日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。